

## 第39回

### ここらへんで繁殖のお話し(その7 胎仔の発育のおはなし)

(有)シェパード 獣医師 松本大策

お元気ですか。「安全と水はタダ」と思われていた日本も、ミネラルウォーターの売れ行きも鰻登り、自宅にいても安全ではないという認識からホームセキュリティーにお金をかける人も増えてきました。なのに、食の安全には消費者はお金を出してくれない現状があります。食べ物って、もっとも大切なことなのにね。でも、僕たちはあきらめず、また消費者に反感を持たず、穏やかに語りかけることを続けましょう。かならず解ってもらえると思います。

## 母牛の繁殖の仕組み 7

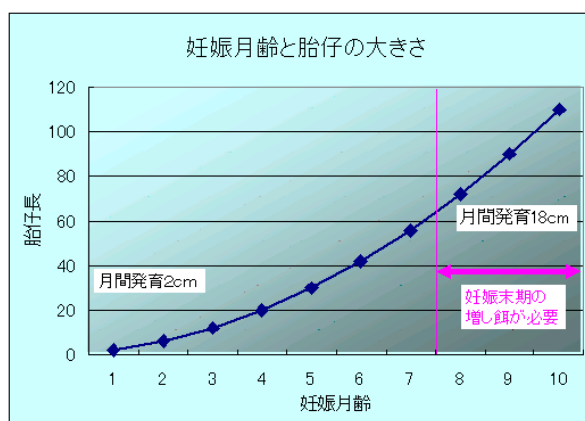
さて、前回は胎児を育てる胎盤の仕組みと牛さんと人間の胎盤の違いについてお話ししました。今月はお母さんから少し離れて胎児の成長を考えてみたいと思います。

受精後40日から2ヶ月目くらいのあいだに妊娠鑑定をしてもらうことが一般的だと思いますが、「よかったね、受胎してるよ。」といわれたものの、いったいどの程度の大きさで育っているのか、どんな形をしているのか、なんてなかなか外から見ても解りませんよね。

畜産振興社(養牛の友の会社です)から発刊されている高橋先生の本には、3ヶ月齢弱の胎児の写真が載っています。(すばらしい本ですから、繁殖農家さんで興味のある方は読んでみてください)写真を転載させていただこうかとも思ったのですが、グロいといえばグロいので、よい子も見るとこのHPには載せません。まあ、肌色のお魚みたいな物です。

それでも胎児の成長くらいは知っておきたいでしょ? お母さんのお腹の中にいる胎児の大きさは概算で知ることができます。それは

$$\text{妊娠月齢(胎齢)} \times (\text{妊娠月齢} + 1) = \text{胎児の体長}$$

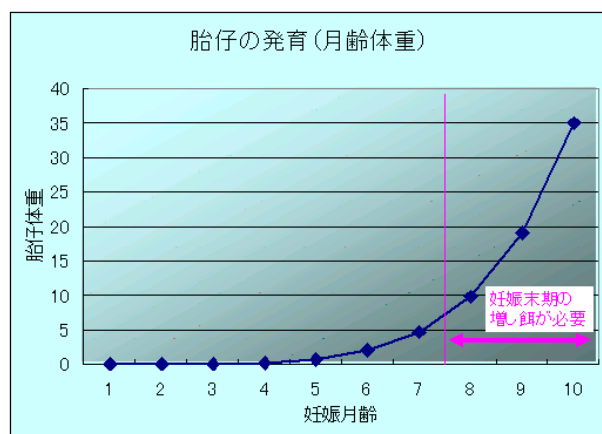


という式で計算できるのです。つまり妊娠2ヶ月だったら  $2 \times (2 + 1) = 6\text{cm}$ 、3ヶ月齢だったら  $3 \times (3 + 1) = 12\text{cm}$ 、という具合です。知っていたからって、別に赤ちゃんが大きくなるもんでもないのですが、こう



いうイマジネーションというのも、愛情を持って牛飼いをするためには必要なのです。

それだけではありません。じつは、この式にはもう一つ大切な意味が隠されています。それは、「赤ちゃんはおかあさんのお腹の中で、加速度的に発育する」ということです。



これって、どういう事かという、妊娠初期は赤ちゃんはたいした発育をしないけれど、妊娠末期になるとターボがかかったように発育が進む、ということなのです。

先ほど、胎児の体長を計算する式についてお話ししましたが、胎児は立体なので、実際の大きさというか、体重はあの式で出た体長の3乗(体長×体幅×体高)で表される

のです。ですから、分娩予定日前の2ヶ月間は、赤ちゃんが発育するための増し餌をお母さんに与えてあげないといけません。厳密には日本飼養標準などを参考に計算した方がよいのですが、大まかにいうと体重470kg程度のお母さんで配合 1kg、粗飼料 1kg 程度増やしてあげます。この際に、お母さんの体型をよく観察してあげましょう。お腹が小さい(DM:乾物量、餌のカサ不足)と子牛が小さかったり、生まれたあとの子牛が病弱だったりします。お腹が大きいだけではダメで、お母さんが痩せたり太ったりしないように注意してあげます。こちらはTDN(カロリー)の多少で決まりますから、配合飼料の量や粗飼料の質で加減します。カロリーが多いとお母さんが太ってきて、産後の発情はいいのに受胎率が悪くなることが多いです。カロリーが足りないと、お母さんは自分の体を削ってお腹の赤ちゃんを育てますから、分娩後に卵巣や子宮の回復に回すエネルギーが足りません。発情回帰が悪くなることが多いのです。

